木の文化・木のおもてなし

ガイドブック

目次

「木の文化・木のおもてなし」がめざすもの　—3
「木のおもてなし」に活かす日本の「木の文化」の定義　—3

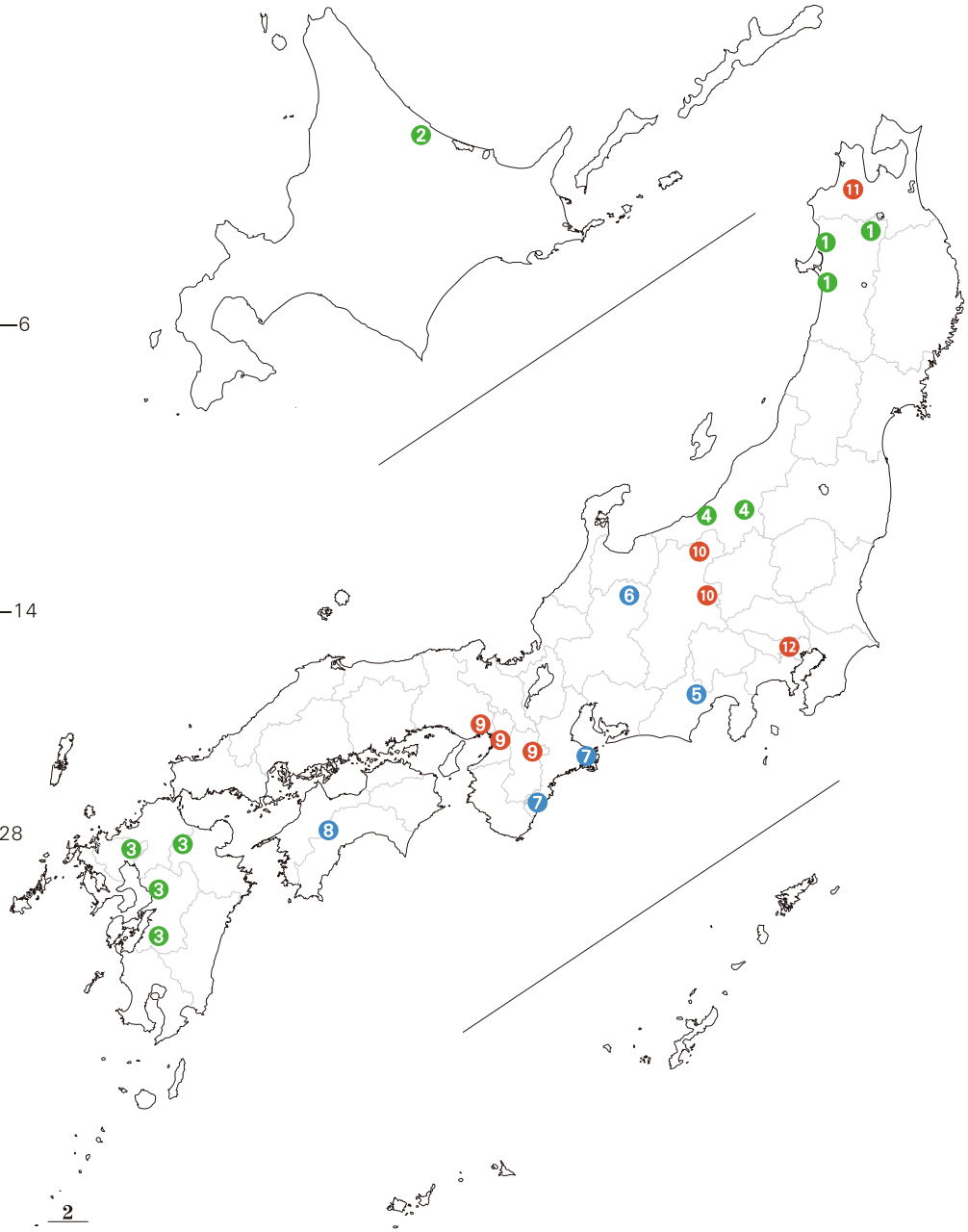
「木の文化・木のおもてなし」の視点　—4

私が考える「木の文化・木のおもてなし」
涌井雅之 / 隈研吾 / 水戸岡鋭治 / デービッド・アトキンソン / 赤松明 / 戸村亜紀　—6

「木のおもてなし」の提案　—8

「木の文化・木のおもてなし」事例のご紹介　—9

1 秋田～秋田杉と技、そのいにしえと今を味わう　—10
2 北海道オホーツク地域～クラフト文化を巡る　—12
3 木工のまち・大川と美しい列車の旅～300年の歴史とともに郷土に親しむ　—14
4 新潟・上越～雪国で暮らす知恵は、思いやりと優しさの証　—16
5 富士山～荒ぶる自然と信仰、木とともに生きる旅　—18
6 高山・飛騨～木の文化をたどって歩く、歴史と技の楽しみかた　—20
7 熊野古道・伊勢路～巡礼と尾鷲ヒノキを辿る現代の旅人　—22
8 高知県梼原町～雲の上の町で森と出逢う　—24
9 吉野・堺・灘～桶樽と日本酒の物語　—26
10 長野・軽井沢～懐かしくて、新しい、木と森が迎える国内有数のリゾート　—28
11 ブナの森とヒバの森～癒しと健康、五感への贈り物　—30
12 地域のアンテナショップが伝える木のおもてなし　—32



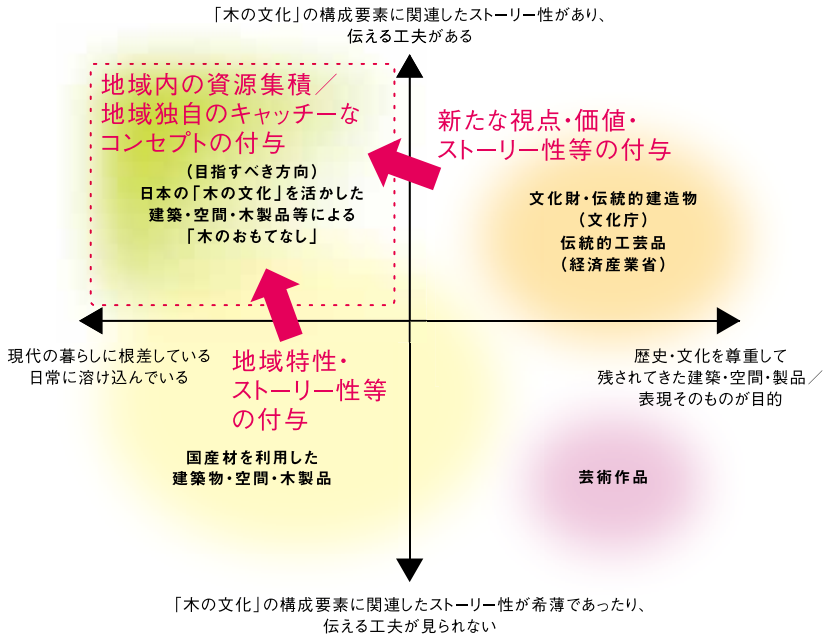
付録DVD

●木の文化・木のおもてなし
秋田編　/富士山編 / 桶樽編

●検討委員特別インタビュー
涌井雅之 / 隈研吾 / 水戸岡鋭治 / 赤松明 / 戸村亜紀

「木の文化・木のおもてなし」がめざすもの

日本は古来より生活のあらゆる場面で木を使い、木に親しんできました。それは自然との共生であり、暮らしの有り様や衣食住と一体化したものであり、必然的なものであったに違いありません。こうした「木の文化」に焦点を当て、昨今、急増するインバウンド（来日観光客）への「木のおもてなし」につなげ、木を使った建築や製品、サービス、体験の価値を向上させ、観光需要の創出や地域の活性化の有力な資源として活用できると考えています。これを通じて、「木を使い、活かす」取組をさらに増やしていくことを目的としています。
そのためには、空間や製品単体ではなく、その背景や森林との共生・循環、技や物語性、木と異素材を組み合わせたデザイン等を合わせて伝えることが必要です。新たな視点や地域特性のストーリー等を付与し、資源を集積しコンセプトを明確にすることで、「モノ」から「コト」への変換を図り、日本の木の文化の持つ「本物感」や「奥深さ」を訴求できると考えられます。



「木のおもてなし」に活かす日本の「木の文化」の定義

日本の「木の文化」のストーリーを構築するための要素は右表のように分類、定義できると考えられます。これらの文化的要素を、ひとつではなく複数有している卓越した取組こそ、インバウンドにとって新鮮で、深く興味をそそられるモノであるに違いありません。大切なことはこれらを「いかに伝えるか」であり、日本や日本人にとってそれが日常的で当たり前のことであっても、文化・風習の異なる国の人々に体感、実感してもらうことが求められているのです。

	要　素	視　点
共生	①産地や作り手を慕う	生産地の環境や、生産者の想いや工夫・努力に目を向け、寄り添い、慕っている
	②足るを知る	資源の循環利用・多段階利用、もったいない精神、自然と調和を実現している
風土	③地域性を活かす	地域の気候・地理、歴史・文化、生業・生活が持つ特色とつながっている
	④時を刻む／活かす	木の持つ時間的価値（経年美化、改修の容易性・自ら手入れする）が活かされている
技	⑤技を活かす	熟練の技や卓越した技術が木の良さを引き出し、用の美や情緒を生み出している
	⑥軸を持ちつつ変える	伝統的価値を軸に据えつつ、現代の生活様式に合う意匠・機能・用法にしている
心	⑦和の心を伝える	日本ならではの心情や所作、作法や趣きお等を、木を活かして表現・演出している
	⑧暮らしが潤う	木を適切に活かすことで居心地・使い勝手を高め、心豊かな暮らしを育んでいる

「木の文化・木のおもてなし」の視点

「木の文化・木のおもてなし」を考える際に、
以下の視点を持つことが重要と考えられます。

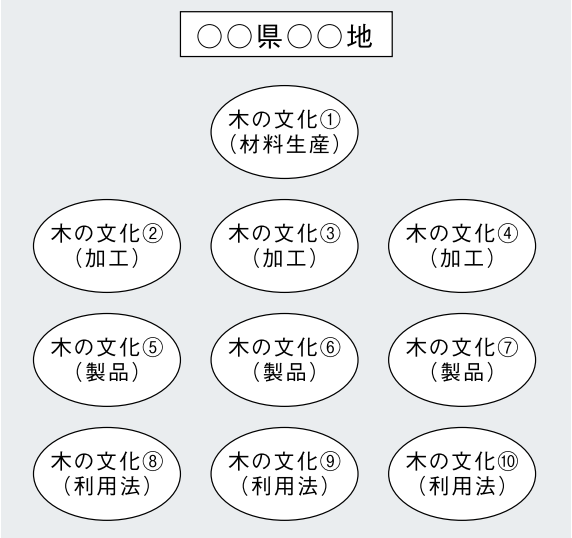
① 特徴的な「木の文化」の構成要素を複数有し、地域の歴史文化・生活様式・地場産業等との関係性の“ストーリー”の深堀り・再整理がなされていること。地域特性を引き出し、独自性があり、キャッチ―なコンセプトが確立され、かつ地域内で複数の資源が面的に集積されている事例群（地域）。木の施設等を拠点に、地域への滞在を促す多様なソフトが構築されていること。

② 複数の施設・製品群等に一貫する「木のおもてなし」の世界観が構築されていたり、「木の文化」の特徴の“ストーリー”を体感できる空間・プログラムが構築されていること。

③ 地域の①林業・木材関係者、②旅行業者、③観光施設（見学・物産等）の何れにおいても、「木のおもてなし」を活かした収益モデルが構想されていること。

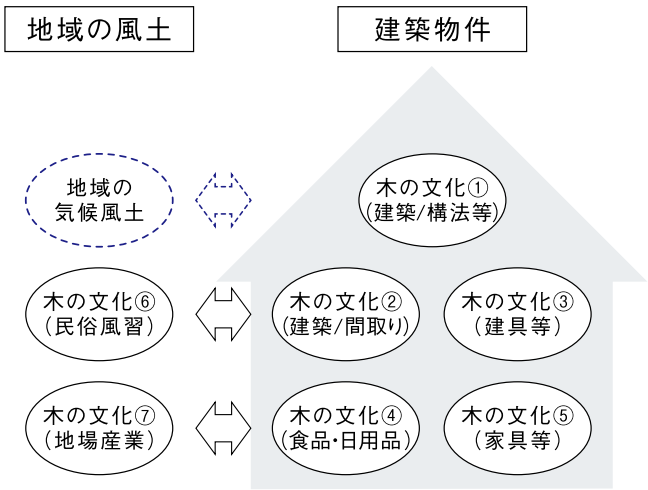
集まった全国の事例をもとに、先導モデルとして3つのパターンを考えました。もちろん、これらの組み合わせやさらに進化させたモデルもありえます。

（例１）地域に多様な「木の文化」を支える技術・製品群等が面的な集積された地域



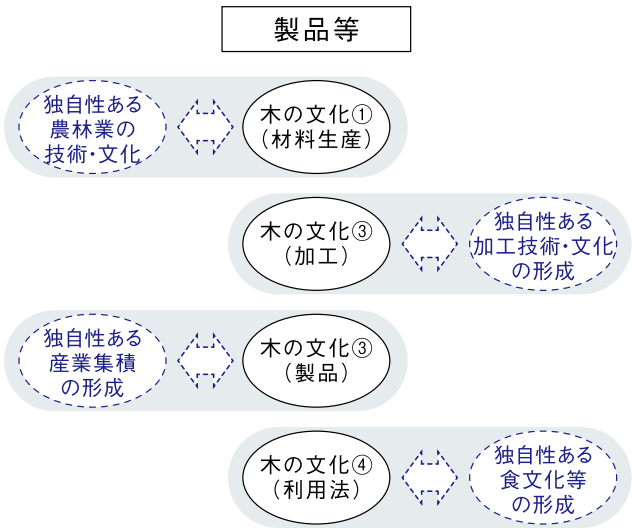
地域において、木の文化を支える材料生産から加工技術、製品や材料を活かした建築、その利用法までが集積し、それぞれが関係性を持ちながら、地域の特性や個性につながっているもの。

（例2）多様な「木の文化」が集積されている建築物等（宿泊・飲食施設、文化・交流施設）



地域の気候や地理、民俗や風習、地場産業などが木を使った建築物等の構法や間取り、設備、建具や家具、日用品等に活かされ、そこでの暮らしを支えたり、来訪者の滞在や体験、交流へつながっているもの。

（例3）周辺分野の技術・文化と連動して、多様な文化の派生に寄与する製品等



木の文化としての材料生産や加工、製品、利用法などが農林業や加工技術、産業や食文化などの周辺分野と時には地域をまたいで連動し、独自の発展・進化を遂げて、多様な文化を生み出しているもの。

私が考える「木の文化・木のおもてなし」

本事業の検討委員を務めた６名の有識者の方々にそれぞれのご専門の立場から、「木の文化・木のおもてなし」をどう考えるべきか、どう活かしていくかについてメッセージをいただきました。

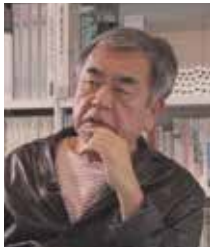
涌井雅之

東京都市大学特別教授、
岐阜県立森林文化アカデミー学長。
造園、ランドスケープアーキテクトとして「景観十年、景観百年、景観千年」と唱え、人と自然の空間的共存をテーマに多くの作品や計画に携わっている。

私は「景観10年、風景100年、風土1000年」と言うのですが、日本の景観の後ろには暮らしのある風景があり、その後ろには暮らしという文化を醸成してきた風土があります。その風土の中で醸し出された文化、技能、技術。これらが地域を光り輝かせている一番大きな要因だと多くの人に気づいてもらいたいと思います。
長い間その土地に暮らしてきて、自然や産物を知り、それを上手に自分のものにしながら暮らしの基礎をつくっていく。誇りを持って内発的に自分たちの光を外に見せる行為と、未来が見えないがゆえにヒントを探す人々がシナジーするのが今の観光です。今の日本は宝物の蔵であると皆さんに気づいてほしいと思います。

隈 研吾

建築家、東京大学教授。
その土地の環境、文化に溶け込む建築を目指し、ヒューマンスケールのやさしく、やわらかなデザインを提案、国内外で実績多数。新国立競技場に47都道府県の木を使うなど、木の建築を多く手がける。



木は人間の手でつくったことを一番後世に残しやすい材料で、手をかけたことがそのまま木に伝わるので、職人や工務店でも良い人に出会い、手を木に残せば、それは自動的にメッセージを伝えてくれます。
これからの街づくりの武器は、昔からある木の建物と新しくつくられた木の建物が相乗効果を生み出し、響きあうものにすることだと思います。
日本が好きなインバウンドの方々は、自分で発見したことを大事にしています。誰もが行く所よりも、自分が発見した面白い場所を大切にするので、どこにでもある情報ではなく、別の興味をそそられる情報だと入り込んでくれます。日本の地域にはそんな宝がまだまだ眠っていますから、彼らに宝探しの楽しみを提供することが重要だと思います。

水戸岡鋭治

工業デザイナー。
建築・鉄道車両・グラフィックなどさまざまなジャンルのデザインを行う。クルーズトレイン「ななつ星in九州」「或る列車」などJR九州の駅舎、車両のデザインは、広く社会の注目を集めた。デザイナーは地域の編集者であると自らの仕事を語る。

自分の国の豊かな気候、自然、文化、食を吸収し学習することは最も大切です。豊かな旅をすることが豊かな生活を送る基盤になります。日本人が豊かな旅をしていることを海外の人が知り、日本で旅をする。日本の文化を海外の人に見てもらい、お互いの文化に理解を深めていくことで、様々な文化が重なってより豊かなものが育っていくと思います。
手間ひまのかかった、曼荼羅のような世界が豊かなものだと人は感じます。「ななつ星」が喜ばれる理由は、手間がかかっていて、クラシックで、今の技術ではつくれないものだからです。多くの人が喜び、世界中の人が感動する商品こそ生き残っていくと思います。

デービッド・アトキンソン

小西美術工藝社社長。元ゴールドマン・サックス証券アナリスト。2009年、国宝・重要文化財の補修を手がける小西美術工藝社に入社、2011年に同会長兼社長に就任。日本の伝統文化を守りつつ、日本の観光立国へ向けた改革の提言を続けている。

観光立国に必要な4つの要素は「気候」「自然」「文化」「食事」と考えています。日本は雪も降れば亜熱帯もある気候と、豊富な森林、里山など自然との付き合いが深く、暮らしや地域、食とも密接につながってきました。こうした背景から「木の文化」は自然と共生してきた日本の暮らしの歴史の重要な側面を持っており、それはインバウンドにおいても独自の魅力を感じるものと考えています。森林や木を軸に据えた体験や、スキー、ハイキング、山登り、川下り等は、実は日本が見落としてきた重要な観光資源といえるでしょう。日本の観光スポットは「点」で行われ、滞在時間も短く、生産性が低いものが多く感じます。日本の森林や木からひも解かれるストーリーは、建築物や伝統工芸のみならず、食、体験や健康・癒しまで幅広い「おもてなし」の観光コンテンツを生み出すでしょう。そのヒントがこれら事例の中にあると思います。
森林や木の付加価値を高めれば、木の利用が促され、森に手が入り、結果的に健全な森づくりが進みます。日本の森林保護のためにも、こうした視点で多業種が組むことは重要で、地域経済の活性化にもつながります。

赤松　明

ものつくり大学学長。
専門は木材加工学。木造基礎や家具製作などを通じ、木材加工法を研究している。現在は学長として、次世代のテクノロジスト育成に励む。2023年技能五輪国際大会の愛知県への誘致に向けた検討会の座長をも務めた。

木は腐る素材です。それは時には人間にとって不利益になることもありますが、地球へ戻るということでもあります。自然に還るということはこれからは長所として考えるべきです。
木に対して関心を持たない人々が増えてくると大変です。子どもたちには木を使ったものづくりに憧れを持ってほしい。今、木に携わっている人、木でものをつくったり、環境を整備している人は自らのやっていることに自信を持ってほしいと思います。世界や地球のために、自分たちの経験を活かし、誇りを持って社会とつながってほしいと思います。

戸村亜紀

クリエイティブディレクター。商業施設のネーミングからロゴデザイン、プロダクト開発など幅広く活躍。都市と農村を繋ぐサービスを生み出す活動など、環境問題や地域産業活性化を通じて次世代の居場所と出番の創出を目指している。

日本には、木は生き物であり、それを大切にしようという文化が根強くあり、この文化を海外へ発信することで海外からの見方もまた変わってくるでしょう。
日本の伝統的な木の道具をどう融合させ、進化させるのか、も大切です。必要のないものは求められなくなりますから、技術を何に置き換え、100年続く仕事を生み出せるのか、を考えることが重要です。そのためには、産地以外の人との交流や海外の意見も聞くことも必要です。
人が集まれば、ものも増えます。それによって今まで来なかった人が来ると、次に様々なアイデアも集まります。森へ、地域へ、まずは人を集めることが大切です。

「木のおもてなし」の提案

木のおもてなしを実践するためのポイント

事例や検討委員の意見をもとに、木の文化を活かした木のおもてなしの視点や手法を整理・分析しました。
これらを組み合わせたり、ひとつの流れにまとめていくことで、インバウンドを始めとする来訪者へインパクトある訴求が実現し、
新たな木の活用促進につながることが期待されます。

- 地域のブランド材等を使った歴史的建築物と現代の木造建築を同時に味わえる体験を提供する
- 公共空間や交通など地域の「窓口」となる空間に木を取り入れ、人が集まる機能を付加する
- 地域特有の木の文化を、異なる空間や場所、アイテムで複数、楽しめる仕掛けを持つ
- 木を使った繊細な技、しつらえなどで「非日常感」を演出し、その良さを味わいながら贅沢な時間を過ごしてもらう
- 地域の地理・気候など自然の多様性に合わせた「自然共生の暮らし」を木の空間で味わってもらう
- 自然共生の国が育んだ、木を生き物や神様として扱う独自の日本の文化とともに木を使っている意味を、海外へ発信する
- 体験や環境、空間を通じて、地域の自然や森林を楽しみ、心身を癒し健康にすることで、滞在そのものの価値を向上させる
- 地域の文化に培われた技術を現代使いに置き換え、新たなものづくりを見せながら、それを購入、消費、体験につなげる
- 空間やものをつくる「人」に焦点を当て、「記名性」にこだわる見せ方、体験によって、希少性や特別感を伝える
- 木の来歴（トレーサビリティ）、生産プロセスに焦点を当てる、同じ樹種でも地域特性を明確にし、地域性とともに訴求する

シンボル的な「木の文化」を活かした「木のおもてなし」空間・体感プログラムを通して、地域が培ってきた「木の文化」の価値・魅力を体験

（1）地域のオリジナリティのある「木の文化」のストーリーを、地域の歴史文化・生活様式・地場産業の状況等をふまえて深堀して再整理し
（2）その深堀した「木の文化」を支える技術・文化の価値・魅力を体感できるプログラム（実演・ワークショップ等）の開発等を通して、体感的にその魅力・価値を発信

木への親しみ、木の良さをより多くのインバウンド、来訪者へ伝える

ストーリーを知ることで新たな気づき、関心を呼び起こす

多様な分野、業種の参画を得て、多様な「木のおもてなし」を開発したり、展開していく